

特集
藍より青き吉野川
川と人のかかわり

Special Features
The Blue Color Yoshino River rather than in Color Indigo
Mankind and the River

吉野川地誌

The Geography of the Yoshino River

吉野川流域の開発の歴史

福家清司

FUKE Kiyoshi

徳島県教育委員会文化財課/課長



吉野川流域平野は徳島県内最大の平野で、古くから人々の生産活動、生活の場となり、本県の産業経済の重要な基盤となってきた。古代以来の政治・経済の拠点の移り変わりを眺めてみても、古代の国府は、吉野川最大の支流鮎喰川が吉野川と合する地点に広がる鮎喰平野上の徳島市国府町に位置し、中世前半期の守護所の位置は今日なお確定されないが、その候補地はいずれも吉野川流域に位置する。

同後半期の場合、室町幕府の守護細川氏は、当初、中流域の板野郡土成町秋月に守護所を置いたが、後に吉野川河口平野のほぼ中央部の板野郡藍住町勝瑞に移転、細川氏に変わって阿波を支配した三好氏もまた勝瑞を拠点とした。

さらに長宗我部元親による四国統一を退けた豊臣秀吉から阿波国を拝領した蜂須賀家政は、吉野川河口南岸の徳島市中心部に藩都を置いた。廃藩置県後の県でも藩庁所在地を継承し、今日に至っている。

以上の政治的拠点の変遷からみても、吉野川を征するものは阿波を征する、と考えられてきたともいえる。



写真1 - 浦の池(板野郡土成町)

では吉野川流域を舞台とした人々の営みはどうか。ここでは紙幅の都合もあり、流域における開発の歴史に焦点をあててその営みについて眺めてみたい。

1 古代の開発と条里制

流域を舞台とした最初の大規模な開発は、古代律令国家による条里制^{a)}の施行であった。奈良時代、吉野川流域は下流側から順に板野・名方・阿波・麻植・美馬の各郡に行政区分された。この内、下流域の名方郡・板野郡には大規模な統一一条里が施行された。特に徳島市国府町においては、広範囲に条里地割の痕跡を見ることができる。また、吉野川上流域の三加茂町でも整然とした方格地割が認められ、下流域から上流域にかけての広汎な地域に条里制が施行されたことが知られる。

ところが、こうした条里地割り認められる地域でも、灌漑用水は吉野川から引水したものでなく、周辺の支流や谷筋から直接引水したものであった。このことは当時の技術を以てしては、吉野川のような大河川から直接灌漑することが困難であったことを示している。そのため、古代の阿波国は「豊かな水」の存在とは裏腹に、水田が少なく、班田農民に貸与する水田が不足したため、陸田(畠)を班給せざるを得なかった。

特に、吉野川上流部や北岸域では日照りの害が大きかったことから、灌漑用水の整備は当時の政治上の課題ともなっていた。この課題に取り組んだ能吏で歴史に名を残した人物として、承和13(846)年に阿波介に任じられた山田古嗣がいる。古嗣は特に水不足が深刻であった阿波・美馬両郡において、水不足解消のための溜め池づくりを行うなどの善政をしいたことで知られ、池田町の「古池」、土成町の「浦の池」は山田古嗣が築いた溜

a)古代の土地区画制度。土地を道や溝で一町(六十歩)方格に区画したものを坪といひ、三六坪を一里とした。班田収授を円滑に実施するために用いられた。(日本語大辞典)



図 - 新島荘図の記載内容

め池であると今日まで伝えられている。

2 東大寺領新島荘と絵図

東大寺領新島荘と大豆処の2か所の荘園は、ともに古代荘園図が正倉院に架蔵されていることで、広く知られている。新島荘図は天平宝字2(758)年に作成されたもので、枚方里を中心とする地域を示している。枚方里は、東西方向に流れる「大川」の南岸に位置し、東西の直線的な「道」、堤防説がある「堺堀城」、人工的な用排水路とみられる「堺堀溝」などが描かれる。名方郡条里の復元によると、枚方里は吉野川に面した極めて低湿な土地に比定され、当時、すでに大河川沿いの低湿地の開発が積極的に行われたことが見てとれる。この枚方里の場合、周囲を堤防や堀で囲み、その内部が集中的に開発されており、古代の吉野川下流域の開発技術を考える上で貴重な事例となっている。

一方、大豆処図にもやや湾流しながらも東西に流れる「大川」が絵画風に描写される。川幅は新島荘図とほぼ同じ1町分(約109m)である。この図には、道が「大川」を横断する地点に「川渡船津」の記入があり、川渡しの施設が整備されていたことが示されている。また、川面には2羽の水鳥が写実的に描かれている点も大きな特徴となっている。

以上の2点の荘園に記される「大川」は、吉野川に関する最も古い記録である。

3 荘園の成立と流域の開発

平安末期から鎌倉初期にかけての時期は、吉野川下流域の低湿地の開発が広汎に進められ、多くの荘園・公領が成立した時期でもあった。吉野川河口部南岸の南助任保もそうした例の一つである。保は、未開の原野や、洪水などのために荒廃地となっていた場所を開発することを目的として、国司の認可を得て設置されたものである。この地で立保を申請し、実際に資材を投下して開

発を推進したのは、国衛の役人であると同時に阿波国内でも有数の有力武士であった粟田重政という人物であった。重政による開発は鎌倉初期には一定の成果が上げられ、南助任保では約50町歩の耕地が開かれた。

こうした保内の開発地は、当初は課税が免除されたとしても、もともと国衛(阿波国の役所)に税を納める土地であったために、年数が経過すると、課税の対象地とされた。しかし、こうした国衛による課税や国使の入部は、資材を投下して開発を行った開発領主の立場からすると、自らの権利が侵される形となったため、開発領主は縁故を求めて、この開発私領を荘園にしようとする運動を始める場合が多かった。南助任保も例外ではなく、中流貴族の大江泰兼に寄進、大江泰兼から奈良春日神社に寄進されて、春日神社領富田荘が成立している。時に元久元(1204)年のことであった。

このように荘園の成立は当該地域の開発の結果として読みとることができるが、荘園領主や荘園の役人は、年貢等の確保を目的として荘園内の開発を積極的に推進する。今日、遺跡の発掘調査などによって、吉野川下流平野から中世集落の遺跡が発見されることが多いのもこうした事情によるものといえる。

次に、吉野川の河口に位置する萱島荘を取り上げる。当荘は康治3(1144)年には石清水八幡宮領の荘園として成立を遂げていた。当荘の場合は、開発領主が荘園の下司職に就任したと推定されるが、その下司職は紀伊国出身の隅田氏であったことが知られる。

当荘の開発との関連で興味深い点は、荘園経営の拠点となっていた石清水八幡宮の末社であった別宮が、吉野川の河口に突き出た洲の上に設けられていた点である。一般に石清水八幡宮は社領荘園に末社として別宮を創建し、荘園経営上、重要な役割を与えたことが知られている。萱島荘自体は広大な荘園として記録に現れるが、そうした重要な役割を果たした石清水八幡宮の別宮が、荘園の東端にあたる吉野川河口に最も近い地点に置かれていたことは、この地点が特別の意味を持つものといえる。この地点は中世、近世の記録に見える港津「別宮」の位置であったと考えられることから、萱島荘の経営拠点もこの港津との関係でこの地点に置かれていたものであろう。

下司隅田氏は紀伊国隅田荘(和歌山県橋本市)を本貫地とする武士として知られるが、紀伊国吉野川を舞台とした水運にも関わりの深い氏族とされている。そうした隅田氏が経営に係っていた萱島荘は、成立段階から紀伊水道および吉野川の水運と深い関わりを持っていた



写真2 - 千五百河原港跡(三好郡池田町)



写真3 - 吉野川下流の風景 名田橋北岸付近から上流(第十堰)方向を望む

荘園であったと考えることができる。

4 吉野川の水運

吉野川は鉄道が整備される以前には、多くの川船が行き交う幹線流通路として利用されていたため、多数の川湊が点在し、燈台代わりに利用された石づくりの常夜灯が今に伝えられている。そうした吉野川の水運の歴史についてはあまり記録が残されていないが、「離宮八幡宮文書」によれば、鎌倉時代末期の吉野川に「新関」が設置されて、水運の妨げになっていたことが記されている。このことから、すでに吉野川を舞台とした水運が活発であったことが判明する。この古文書は大山崎油座神人による活動が妨害されたことを伝えるものであり、当時、京都大山崎の油座神人が原料の荏胡麻の集積などのために、吉野川を舞台に活発な活動を展開していたことを物語るものである。

また、流域の荘園等の多くは、京都や奈良まで年貢を届けていたが、その大半が水運を利用して、吉野川を下り、海上輸送を行っていたと推定される。麻植郡の山間部に位置した種野山の場合は、年貢の京上は「兵庫送り」と呼ばれ、海賊等による襲撃の恐れがあったことから、番頭と呼ばれた現地有力者が警護のために乗船したことが知られている。

5 吉野川と藍

「藍と言えば阿波、阿波と言えば藍」といわれる程、阿波の藍は有名である。江戸時代、吉野川流域は文字通り藍一色であった。藍が阿波の著名な特産品となるのは江戸時代のことと従来考えられてきたが、文安2(1445)年の「兵庫北関入船納帳」が世に紹介されたことによって、当時、阿波国が西国唯一の藍移出国であり、すでに藍が阿波国の特産品として大量に栽培されてい

たことが初めて知られるようになった。

中世の阿波藍は、主に畿内の染色業者によって消費されたと考えられるが、その藍が、どこで生産されたかは記録の上では具体的に確認できないとしても、江戸時代初期の状況から考えて、吉野川下流域を中心とした地域で主に栽培されていたことは容易に推察されることである。

6 近世の開発—徳島城と城下町徳島の建設

江戸時代に入って最初の大開発は、藩都徳島の建設であった。豊臣秀吉から阿波一国を拝領した蜂須賀家政は、一宮城(徳島市一宮町)に入った直後から、新しい藩都の建設に着手した。新しい居城は名東郡富田荘内の当時「猪山」と呼ばれていた小高い山上に築城された。そして猪山が所在する地域を徳島と改めたことから、この新しい居城は徳島城と呼ばれ、新しい城下町もまた徳島と呼ばれることになった。この城下町徳島は吉野川と支流である寺島川・新町川などの河川が形成した三角州上に位置しており、極めて低湿な土地であった。蜂須賀氏は一つ一つの三角州を大まかな単位として、町割りを設定したが、家臣団の屋敷地などでは悪水の排水対策として、縦横に溝を巡らすなどの対応を行っていたことが近年の城下町の発掘調査などから明らかになってきている。城下町徳島の建設は、近世大名蜂須賀氏が阿波入国直後に行った最初の大規模な土木事業である。それまで吉野川河口部に位置し、人口も少ない低湿な土地に、城下町徳島という大規模な人工都市を建設することは、近世大名蜂須賀氏が、その権力を誇示することによって、文字通り新しい時代の到来を人々に印象づける一大事業となったと考えられる。